

『契情倭莊子』 蝶の道行

天明四年（一七八四）の並木五瓶の歌舞伎『けいせい倭莊子』の中の、「道行二世の縁花の臺」が人形浄瑠璃化されたものです。宮園節で初演された道行が、文政元年（一八一八）に義太夫節に移されて、稲荷境内で興行されました。この時、原作の登場人物が整理されて、二人だけの道行となったようですが、道行につきものの「フシ送り」もなく、異色の曲といえましょう。

北畠靱負之助と許嫁の弥生姫がお尋ね者となり、北畠家の越野勘左衛門のもとに匿われます。勘左衛門の妹小槇は、近藤軍次兵衛の息子である助国と人目を忍ぶ恋仲。母検垣の暗示によって勘左衛門は、小槇を連れて不和である軍次兵衛のもとへ押しかけ女房に出かけますが、軍次兵衛が拒絶するので小槇の首を切ります。このため助国も自害するので、強悪な軍次兵衛も悔い改め、二人の首は靱負之助と弥生姫の身替りとなりました。この二人が、来世で蝶と姿を替えての道行が本作というわけです。

明治四年（一八七一）の上演時以降は途絶えていたのを、昭和六年（一九三一）五月二十九日に三味線の勉強会「野沢会」で久々に上演され、昭和十一年の新義座公演でも演奏、昭和十三年には四ツ橋文楽座で人形付きで上演されました。ほかに昭和六年ごろに東京の豊澤松太郎が復曲した別の曲もあるとのこと。

人が蝶になるという魅力的な発想は、『莊子』齊物論の「昔、莊周夢に胡蝶となれり。(略)知らず、周の夢に胡蝶となれるか。胡蝶の夢に周となれるか」という有名な逸話に基づくと考えられます。ほかに鴨長明『発心集』にも「佐国蝶となる」の逸話があります。主君の身替りとなって兄に首切られた小槇と、それを知って切腹した助国が、蝶に転生して楽しい思い出を語る。やがて地獄の責め苦をうける終盤の、責めの合の手が本曲独特のイメージを形作ります。

（児玉竜一）